龍谷大学仏教文化研究叢書 9

中古中世和歌文学論叢

大取一馬編

思文閣出版

龍谷大学仏教文化研究叢書 9

大取一馬編

中古中世和歌文学論叢

江苏工业学院图书馆
藏书章

思文閣出版

龍谷大学仏教文化研究叢書　9
中古中世和歌文学論叢

1998(平成10)年12月1日　発行

定価：本体7,800円(税別)

編　者　大取一馬
発行者　田中周二
発行所　株式会社思文閣出版
606-8203 京都市左京区田中関田町2－7
電話 075-751-1781(代表)

印刷　同朋舎
製本　大日本製本紙工

©Printed in Japan
ISBN4-7842-0983-2 C3090

序

先般、私共は、家郷隆文教授（現在は龍谷大学名誉教授）を研究主任として、龍谷大学図書館蔵写字台文庫旧蔵の『四十人集』を、解説を付して影印し、『龍谷大学善本叢書18』（全三冊）として公刊した。この『四十人集』は周知の如く、平安期から鎌倉期にかけての歌人四十一人の私家集を、小澤蘆庵及びその門下の者が中心となって書写・校合した写本四十冊の叢書である。これを分担して解説するに当たり、調査・研究する過程で各自が新たに見出した研究テーマを、このたび論文にまとめて編集し、龍谷大学仏教文化研究叢書の一つとして出版していただくことになった。

各自の論文で取り扱ったものは、直接には歌論書や歌合判詞、私家集、私撰集、古筆切等であるが、その研究をとおして、中古・中世の和歌の理念や特質、古代和歌受容の問題、さらには作品の成立や解釈に係わる問題、新出資料の価値や散佚私家集を解明する問題等、それぞれが和歌文学研究の現段階での問題点と直接取り組み、それを究明しようとしたものである。

追求半ばの論文もあり、今後の課題も多いが、このたび本書を公刊することにより、学界の批正を得て、さらに和歌文学の研究が推進されることを願ってやまないものである。

一九九八年十月十五日

大取一馬

中古中世和歌文学論叢

目次

序　大取一馬

定家の「観念」　家郷隆文　3

中世歌論書の万葉歌受容考　石原清志　19

藤原盛方の伝記と和歌
——散佚私家集研究の一環として——　大取一馬　89

『類題』『新類題』の成立とその撰集資料　日下幸男　121

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

『伊勢物語』初段に対する中世と近世の理解
——現代訳注本見直しのための試論——　部矢祥子　141
「散る別れこそ悲しかりけれ」
——西行の花に寄せる心——　中西　潔　161
中世古筆切点描
——架蔵資料の紹介（二）——　小林　強　183
『小馬命婦集』の和歌について　木村初恵　239
『六百番歌合』の「よき持」について　安井重雄　271
執筆者紹介

中古中世和歌文学論叢

定家の「観念」

家郷隆文

定家は、その歌論『詠歌大概』において、「常観二念古歌之景気一可レ染レ心」という。この「観念」とは、定家の歌論にとっていかなる意味を有するものか。これをめぐって可能な限りあきらかにしておきたい。

＊　＊　＊

鴨長明は、その随筆『方丈記』に「仮の庵の有様」を描写したあとに、

そのところのさまをいはば、南に懸樋あり。岩を立てて、水を溜めたり。林、軒近ければ、つま木をひろふに乏しからず。名を音羽山といふ。まさきのかづら、跡埋めり。谷しげけれど、西晴れたり。観念の便りなきにしもあらず。（川瀬一馬校注『方丈記』、昭和四六年、講談社刊）

とある。庵の描写に「阿弥陀の絵像」、「普賢」、「法華経」、「往生要集」、「西」とあって、「観念」の脚注は「極楽浄土は西方であるから、それを念想するてがかりともなる」とする。通用の辞典などの説明にも、たとえば、「観想すること。念想。真理または仏・浄土などに心を集中して観察思念すること。仏・菩薩のすがたを心に思

い浮かべて念ずること」（中村元『仏教語大辞典』）、又「1心静かに思いを対象に集中して観察し思念すること。真実の理法または仏などに心を専注して、深く思いをひそめること。2祈念すること」（石田瑞麿『仏教語大辞典』）とする。

大乗仏教の実践道として、往生浄土の行を明確化して浄土教思想の中核をなす論書に、天親『浄土論』と、その最初の注釈書、曇鸞『浄土論註』がある。その『浄土論註』巻下、解義分に、

［五三］いかんが作願する。心につねに願を作し一心にもつぱら畢竟じて安楽国土に往生せんと念ず。如実に奢摩他を修行せんと欲するがゆゑなり。

「奢摩他」を訳して「止」といふ。「止」とは、心を一処に止めて悪をなさず。この訳名はすなはち大意に乖かざれども、義においていまだ満たず。（『浄土真宗聖典』七祖篇―註釈版―平成八年刊による。一〇五頁）

［五四］いかんが観察する。智慧をもつて観察し、正念にかしこを観ず。如実に毘婆舎那を修行せんと欲するがゆゑなり。

「毘婆舎那」を訳して「観」といふ。ただ汎く観といふには、義またいまだ満たず。（一〇六頁）

［五五］かの観察に三種あり。なんらか三種。一にはかの仏国土の荘厳功徳を観察す。二には阿弥陀仏の荘厳功徳を観察す。三にはかの諸菩薩の荘厳功徳を観察す。

心にその事を縁ずるを「観」といふ。観心分明なるを「察」といふ。（一〇七頁）

とある。

さきの長明のいう「観念」は、ここにいう「観察」であり、「心にその事を縁ずる」（所縁―対象―とする）、「観心分明なる」（観ずる心が明らかな状態）をいうのである。

これに対して、定家の「観念」は、長明のそれとは異なって、「心にその事を縁ずる」ところが、「古歌之景気」である。「仏国土」、「阿弥陀仏」、「諸菩薩」、すなわち浄土を所縁としないにもかかわらず、定家があえて「観念」と言表するのは、いかなる志向があってのことであろうか。

＊　＊　＊

まずあげられることは、つとに指摘されている、定家の『摩訶止観』への接近である。石田吉貞『藤原定家の研究』は、周到に調査して、その「精神生活」の、「仏に対する信仰」と「寂照の精神」という文段において言及する。「定家は安貞二年の終から一年九ヶ月を費やして、『摩訶止観』十巻の書写・移点・校合を行ってゐる」。「単にそれを書写するに止まらず、点を移し校合まで行ってゐるのであるから、それが一般の写経の如き形式的なものでなく、読解を目的としたものであつたことが推測されるのである。のみならず、更に注意すべきことは、定家がその止観の書写・移点・校合の仕事を終へると、その本を明喩阿闍梨に返し、直ちに弘決を借受け、又その書写を行ってゐることである。弘決は『摩訶止観補行弘決』の略称で、唐の荆溪尊者の著した止観の註釈書である。定家が写したのは、明月記に見える所では、そのうち第一巻だけであつたやうであるが、とにかくこの書をまで写してるといふことは、定家の止観に対する熱意の程が窺はれるのであつて、それに止観に現れてゐる思想に定家がその頃強く動かされてたことを示すものではないかといふことを推測せしめるものである。」（二二五頁）「而もこの推測は、その弘決を書写した年から三年の後に、彼が出家した時、法名を明静とつけたことによつて、愈々明確に実証されると思ふ。何となればこの法名は、『天台止観』の「止観明静、前代未聞」から取つたものと思はれるのであつて、そのことは単に文字を天台止観の中から拾つて来たといふやうな軽い意味ではなく、止観思想の根本を把握してゐることを意味すると考へられるからである。『天台小止観』の釈元照の序

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

に『曰二止観一、曰二定慧一、曰二寂照一、曰二明静一、皆同出而異レ名也』とあるやうに、明静は止観・寂照、又定慧と同じ意であり、止観の根本理念である」（二二六頁）とある。

さらに、「定家が晩年に、この止観の思想に強く動かされたであろうことは、前述の如く殆ど疑ふべからざることであるが、しかし、どこまで止観の深遠な思想を理解し、如何なる点に最も共鳴を感じたかは確実に知ることはできない。たゞ彼が法名を明静とつけたのでも分かるやうに、止観の壮大なる方法論よりは、天台禅の中心である寂静の思想に最も強く動かされたであらうことは、或る程度まで考へることができる」（二二七頁）とある。

この論述は、「どこまで止観の深遠な思想を理解し、如何なる点に最も共鳴を感じたかは確実に知ることはできない」という。しかしながらここにこの論点にあえて一歩踏みこんで、推考をこころみたい。定家、『摩訶止観』を披見することによって、いかにしてその歌論の核心部を構築しえているか、という問いである。

＊　＊　＊

この「確実に知ることはできない」領域に、あえて立ち入るとき、信頼性の高い依り所ともいうべきものがある。それは、歌論『古来風躰抄』である。すなわち俊成が『摩訶止観』読解に示唆をうけて、その歌論の核心を形成した足取りを、定家は追随してその延長上に自身の歌論を構築しえたものであろうと、単純に想定されることである。

『古来風躰抄』全編をつらぬく主題は、「歌のすがたことばにおきて、よしのがはよしとはいかなるをいひ、なにはえのあしのあしとはいづれをわくべきぞ」という問い、「あるたかきみやま」からの難問題である。

「なか〳〵いみじくときのべかたく、しれる人もすくなかるべきなり。」「このこころは、としごろも、いかで

申しのべんとはおもふたまふるを、心にはうごきながら、ことばはいだしかたく、むねにはおもえながら、くちにはのべかたくて、まかりすぎぬべかりつる」と、腕を拱く俊成の脳裏に閃くものがあったのであろう。

しかるに、かの天台止観と申すふみのはしめのことはに、止観の明静なること、前代もいまたきかすと章安大師と申す人のかきたまへるか、まつうちきくより、ことのふかさもかきりなく、おくの義もをしはかられて、とうとくいみしくきこゆるやうに、このうたのよき、あしき、ふかきこころをしらむことも、ことはをもてのへかたきを、これによそへてそおなしくおもひやるへき事なりける。（冷泉家時雨亭文庫蔵本、上、二オ、二ウ）

とする。「歌の姿訶」と智顗『摩訶止観』の論脈との間の相即相通性に、その解決の手掛かりを見出したのである。

この法をつたへる次第をきくに、とうとうさもおこるやうに、うたもむかしよりつたはりて、撰集といふものいてきて、万葉集よりはしまりて、古今・後撰・拾遺なとのうたのありさまにて、ふかくこころをうへきなり。（三オ）

として、「しるしをはり」、「この集をは、名つけて古来風躰抄と名つく」という。

「かれ」仏道と「これ」歌道との相関関係を、

かれは法文金口のふかき義なり。これは浮言綺語のたはむれにはにたれとも、ことのふかきむねもあらはれ、これをえんとしてほとけのみちにもかよはさんため、かつは煩悩すなはち菩提なるかゆへに、法華経には、若説俗間経書　略之　資生業等皆順正法といひ、普賢観にはなにものかこれつみ、なにものか是福、罪福無主、我心自空なりとときたまへり。（三オ・三ウ）

ととらえて、

よりて、いま、歌のふかきみちも、空・仮・中の三諦にたるによりて、かよはしてしるし申なり。（三ウ・四オ）

という。

ここに肝要なことは、「歌の深き道」と「空・仮・中の三諦」とが、いかに相似し、相通するととらえているか、という論点である。

＊　＊　＊

「空・仮・中の三諦」について、『摩訶止観』巻第六の下、第七章「正しく止観を修す」（国訳本、岩波文庫所収）によって、俊成が披見していたにちがいないと推測される文段として、まずあげることのできるのは、つぎのごとくである。

無生門のごときは、千万重畳なれどもただ無明の一念の因縁所生の法、即空即仮即中の不思議の三諦、一心三観、一切種智、仏眼等の法なるのみ。無生門すでにしかり、諸の余の横の門もまたまたかくのごとし。種種に説くといえどもただ一心三観なり。故に横なく竪なし。

ただ一心に止観を修するに、また二となす。

一には総じて一心を明かす。二には余の一心に歴るなり。（七八頁）

とある。この文段は、現代語訳本によれば、

無生の教えは幾重にもその意味が重なっていたが、これを要約すれば、ただ無明の一念が因縁によって生じたものであり、それはすなわち空であり、すなわち仮であり、すなわち中であるということであり、それは

思議を超える三諦であり、一心における三観なのであり、一切種智や仏眼などの教えに相当するということにほかならない。無生の教えがそうであるように、その他の種々の教えについても同様であるということである。種々に説いても、それはただ一心の三観に極まれるのであり、だから横でも竪でもないというのである。

この一心に止観を修することについて、一つは総じて一心を明かし、二つは他の一心に歴ることを説きたい。（池田魯参『詳解摩訶止観』現代語訳篇、平成七年、大蔵出版刊、四二九・四三〇頁）

とある。

門口真大『天台止観の研究』（昭和四四年、岩波書店刊）は、「天台大師によれば、一色一香といえども中道にあらざるものはない。一境をあげれば、そこには必ず三諦を具する。これが諸法実相である。したがって諸法の実相に徹するためには、三観が一心に円融しなければならない。これが円教の中核の教義である。しかしこの一境三観や一心三観を他に対して教えようとするばあい、まずは一往は三観を分別しておかなければ、説明ができない。すなわち三観を隔別し、また、空・仮・中と次第して教えざるを得ない。円教を説明し分析したのが、いわゆる隔歴の三諦、次第の三観であり、別教である」（四五頁）と説く。

一心三観とは、「ひとおもいの心のうちに空観・仮観・中観の三観を同時に実現することを言う。三観とは一切を空と観じ、仮と観じ、また空も仮も一であると観ずることである。すなわち現象世界を否定的にあつかう空観、現象世界を肯定的にとらえる仮観、この両者がともに具わってはじめて真理を体得しうるとする中観の三観をひとおもいに一時に観念すること。空観とは仮より空に入る観といわれ、常識的立場の否定であり、我のとらわれからの超脱の立場。仮観とは空より仮に入る観といわれ、空観を全うするところに現われる仏の智慧に照ら

された現象世界の肯定面を表す立場、中観は前二観が別別であるとする見解を批判し、ならべ用いて意義があるとする立場である。天台宗では三観のうちいずれの観にも、他の二観を具えていることを強調する」（中村元『仏教語大辞典』）と説明されているところである。

「三諦円融」という仏語がある。それは、「空・仮・中の三観を同一時に行って、三諦が究極においては別々のものではなくて円融しているという道理を観ずることをいう」と説明されている。

また「三諦相即」という仏語がある。それは「天台宗の円教の立場で説く空・仮・中の三諦が円融不二であることをいう。別教の三諦が隔歴する（別々のものとみなされている）ことと区別する」と説明されている。

ここにおもうに、『古来風躰抄』のいう「空・仮・中の三諦に似たるによりて、通はして記し申す」に「似たる」とは、相即円融（二つの事象が融け合って、無差別一体となっていること）ということにおける相似性を意味するものであろう。

＊　＊　＊

ついで解決すべきは、『摩訶止観』の「空・仮・中の三諦」の「三」に対応するところの、「歌の深き道」における三因子はなにか、という問いである。

まず『古来風躰抄』という書名については、「昔から俊成の当時まで、和歌の風躰がどのように変遷してきたのかを、歴代の和歌を抜きだして示した書物ということを意味しているようだ」（冷泉家時雨亭叢書『古来風躰抄』、解題）といわれている。

この集をは、名つけて古来風躰抄と名つく。（七オ）［再撰本「いにしへよりこのかたのうたのすがたの抄と名つくといふことしかなり」日本古典文学全集所収本］

とあり、

かみ、万葉しふよりはしめて、中古、古今集・後撰・拾遺、しも、後拾遺よりこなたさまのうた、ときよのうつりゆくにしたかひて、すかたもことはもあらたまりゆくありさまを、代々の撰集にみえたるを、はし〳〵しるし申へきなり。（五ウ）

とある。本文にいう「すかた」は、書名の「風躰」と、同義語である。「解題」の指摘するごとく、「風躰」に、俊成自身が音読みで「フテイ」（上二三ウ）、訓読みで「スガタ」（上二五オ）と振り仮名をつけているところから、確かである。

また「ときよのうつりゆくにしたかひて」、「あらたまりゆく」「すかた」に対置し区別する概念は、「ことは」である。

このうたのすかたことはにおきて、よしのかはよしとはいかなるをいひ、なにはえのあしのあしとはいつれをわくへきそといふことの、なか〳〵いみしくときのへかたく、しれる人もすくなかるへきなり。（二オ）

とあり、

いま、あるたかきみやまに、このやまとことのはのみちの風をもふかくしろしめせるあまりに、うたのすかたをもよろしともいひ、ことはをもをかしともいふことは、いかなるをいふへき事そ、（四ウ）

とある。

つぎに、歌の「ことは」と対置し区別する概念は、「こころ」である。

うたのよきことをいはんとては、四条大納言きんたうの卿はこかねのたまのしふとなつけ、通俊卿後拾遺の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com